

野谷文昭編訳

『セルバンテス』 ポケットマスターピース13

集英社文庫ヘリテージシリーズ

二〇一六年

甲斐 清高



ある文学作品が古典と呼ばれるには、時の流れによる風化に耐える普遍的な価値を持つていなければならないのは当然だろう。その一方で、時代の変化とともに、作品の解釈、そして評価は変わり続けるのも当然である。このことを如実に表しているのが、セルバンテスの『ドン・キホーテ』ではないだろうか。この作品が世界文学史上、最も重要な古典のひとつに数えられることは、誰しも認めるところであろうが、その出現から四〇〇年を越えた現在、その受容、その解釈は多岐にわたっている。喜劇的と見られ、悲劇的と見られ、大衆的と見られ、哲学的と見られ、ルネサンス文学の代表と見られ、近代文学の先駆と見られ、現代文学を先取りしているとも言われる。

ボルヘスの短編『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』では、二〇世紀の著述家メナールが一字一句違わずセルバンテスの『ドン・キホーテ』を書く、という奇妙な文学活動を行い、語り手ボルヘスがそのテキストから読み取るのは、セルバンテスの原著とは全く異なる意味である。状況によって作品の解釈が変わるという不安定さ（あるいは豊饒さ）を示しているのだらうが、ここで選択されているのが『ドン・キホーテ』であることは興味深い。そもそも多様な解釈を生み出しているテキストなのだから。『ドン・キホーテ』の翻訳者たちは、ある意味でボルヘスのメナールと似た作業をしているのかもしれない。程度の差こそあれ忠実に、原典を他言語に移し替えることによって、別の作品を作り出すのだ。そして、古典の持つ普遍的価値

を保持しつつ、かつ解釈の変化や多様性に対応するためには、複数の翻訳が必要になるのではないか。

今世紀に入ってから、『ドン・キホーテ』日本語訳が出版され続けているのも必然なのかもしれない。代表的なものは、牛島信明訳（岩波文庫、二〇〇一、初出は岩波書店、一九九九）、荻内勝之訳（新潮社、二〇〇五）、岩根 閑和訳（彩流社、二〇一七）。そしてこのたび、集英社ポケットマスターピース・シリーズのひとつとして野谷文昭訳が加わった。

野谷訳を読んで感じるのは、そのリーダビリティである。この大作に関して展開されてきた複雑な解釈の中でもすれば忘れられがちな、『ドン・キホーテ』は読んで楽しむべき作品である、という当たり前の事実を思い出させてくれる。現代文学においても数々の翻訳を手掛けた訳者であるからこそ、訳文を作り上げていくセンスは秀逸だ。牛島訳や岩根訳は、現代的な日本語になっているとは言え、やはり一般読者から見ると重い表現に偏っており、物語を楽しむながら読み進めていく推進力がいくらか削がれてしまうことは否めない。また、野谷訳には訳注をほとんど入れないという点にも、読むスピードを落とさずに、純粹に物語を楽しんでもらいたい、という配慮が感じられる。荻内訳も訳注を入れず、語りの調子、そのスピード感を大事にした優れた訳になっている。ただ、その講談調の言い回し、句読点の多さは、物語の中に没入するのをやや難しくしているのではないだろうか。物語世界に浸ってドン・キホーテとサンチョ・パンサの冒険を楽しむのであれば集英社の野谷訳、ということになるうか。野谷訳は、格調が失われるほど現代的表現に阿るわけではなく、本来の古典的な風合いを残しながら読みやすくするという微妙な匙加減を実現している。

この新訳が『ドン・キホーテ』の多様な解釈に大きく貢献すると共に、古典という遺産を受け継いでいく伝統の一部となっていくことは間違いない。特に、未読の人たちが『ドン・キホーテ』を初めて体験するのには、野谷訳はお勧めである。抄訳である点は残念だが、実は抄訳であるからこそ、膨大なページ数に圧倒されることなく作品を楽しめる、という利点もあるだろう。とは言うものの、野谷訳による完訳を期待したい思いも捨てられないのである。